

## 鹿兒島十年

家の建て替えも何とか出来て、養老ホームから姑を引き取り、入来町での生活を始めて十年が経過した。振り返って長いような短かったような様々な思いである。



当初は、子会社の社長としてまだ定年まで一年を残していた夫と大学生の三男、生保会社に勤務の決まったばかりの末娘の三人を東京に置いて、姑と二人の生活を始めた。

言葉も半分ほどしか理解出来ず、生活習慣も分からなかったから、公民会にも入らず、二人だけのひっそりとした日々だった。

嫁姑の戦いを長い間続けてきた姑は、自分が姑の立場になっても、いじめる快感を味わえずに残念だったかもしれない。それなりの仕打ちもない訳ではなかったが、私は適当にやり過ごして、自分流に生きていた。

気働きなど出来ない私のこと、行き届かぬ点が多々あっただろうが、常に善意で接して

来た。その姑も逝って、はや来年は七回忌を迎えるが、私には後悔することは何も無い。平成七年の夏、三男と末娘を残して夫が帰郷した。たちまち高校時代の友人や町の人の交流が始まって、酒好きの夫の周辺が賑やかになり、私も忙しくなった。

家を建ててくれた大工さんやその友人たちと定例の飲み会やゴルフが始まった。その他愛ない若い面々の集まりでは、私の手作りの餃子が好評で、徐々に仲間も増えて、今では大判百個作っても、とても足らなくなつた。彼らこそ、その後始まった「入来薪能」の実際の実行部隊である。

忘れられないのは、夫の高校時代の友人、外園博一さんである。当時は鹿兒島銀行から出水のマルイ農協に移られていて、出水には我が家の前を通っていた。そして時折立ち寄っては、夫婦旅行を企画するのだった。

何処へ行ったのが最初だったか、湯布院にある夫の会社の保養所だったろうか。運転は全て外園さん任せで、秋色の阿蘇を抜けて山

なみハイウエイを走った。彼は熊本支店長の時代もあってその辺に詳しく、高千穂峡や通潤橋など案内して下さったし、小林を抜け、綾町で葡萄酒を買ったこともあった。屋久島では、後輩の安房支店長のお世話になり、椎葉では蕎麦打ちの講習も組み込まれていた。中でも高千穂登山は忘れられない。頂上付近で雨になり、強風の中、馬の背を這うようにして戻った。濡れたガレ場を迂闊にも運動靴だった私は何度も滑って転び、ズボンの膝も裂けてしまった。

全て周到な彼の企画だった。次は飢肥にと言っているうちに脳梗塞で倒れられて、その後は電話だけの交流となった。新幹線に土地を提供していたので、開通の試乗に招待され、奥さんが行っているという電話があつてから間もなく訃報を受けた。今となつては、ご夫妻にとつても、私達との旅行が忘れえぬ至宝の時であつたことを願うばかりである。

私も同人誌「火の鳥」の仲間に入れて頂いてから友人が増えた。その誌上に発表した私

の初めての歴史小説「白芙蓉」が、高城書房出版の「鹿児島的女性作家たち」に取り上げられて頂き、お蔭で相星雅子さんに大変お世話になった。その上彼女主催のペンシルクラブにも呼んで頂いた。彼女のひるむ事なき正義感、公正感を私は支持し尊敬している。

その会場で「随筆がごしま」社の上園登志子さんから百十一号記念パーティーに招待され、それがきっかけで今日の私がある。

俠氣一杯、豪胆なガハ八おばさんから、何回も「入来薪能」に無償の援助を受けた。その都度、赤字に弱音を吐いてしまいそうな私の背中を叩いて元氣付けてもらっている。

入来の古い武家屋敷保存に情熱を掛けて来られた元鹿大教授の土田充義先生が、このまま保存して欲しいとご希望の空家を、早慶懇談会でお会いして、ペンシルクラブの中心的存在である桐野三郎氏に会長をお願いして、有志が集い「麓庵家主会」を結成した。

秋晴れの先日、第五回家主会をバベキユーで開いた。お肉も上等だったし、地元の友人

やそのまた友人も加わり楽しい一日だった。

ただ現状では、諸経費も含めて月三万円程の家賃の負担が重く感じられるようになって来たことは事実である。大勢参加して頂ければそれだけ個人負担は少なくて済む。

家主は宿泊など自由に家を利用出来ません。歴史の町、入来はいい所です。家主会入会希望者を募集します。「随筆かごしま」経由でご参加下さることを願います。